甘藷栽培運動の実際

河井弥八は戦中戦後の時代、食糧不足を危惧し、国の政策と相まって、大日本報徳社としても食糧増産運動の推進に尽力した。大日本報徳社社員でもあり、栽培に実績のある丸山方作の甘藷多収穫栽培法による食料増産運動を推進した。甘藷栽培は、やせ地でも栽培でき、肥料も少なくて済み、品種によっては多収穫が期待できる作物である。良苗を利用し、高畝で水平植えの方法で収穫量の増収を図った。丸山方作はこの甘藷の栽培法の研究を通して、これまでにその実績は高く評価されていた。

大日本報徳社としても、この点に着目して、食糧危機を少しでも緩和させるには、甘藷の多収穫栽培が最も適するものと考えた。丸山方作を中心として、食糧増産運動推進の体制を整え、全国の地方報徳社を中心に大日本報徳社の農業講師を派遣して、食糧増産の実を挙げんとする運動に取り組んだ。

派遣された農業指導講師の一人に、地元掛川町杉谷に小柳直吉がいた。小柳直吉は主に福島県に派遣され、福島県内の報徳社を中心に、甘藷並びに麦作栽培の講義や実習指導の農事指導を行った。指導講習会の説明に使用した甘藷栽培法の掲示物や指導先の記録が残されている。その記録を見ると、受講者の多くが食料増産の意気に燃えて、多収穫栽培法に取り組む決意が示されている。

資料：「甘藷苗の植ゑかた」　丸山方作　大日本報徳社
「生理応用甘藷栽培法」　丸山方作　大日本報徳社
小柳家資料